

### 山の祈り自然の響き 修行のお山

## 信州 飯縄山

法務課 佐藤秀仁

8

長野県北部にある飯縄山は、北信五岳（飯縄山、斑尾山、妙高山、黒姫山、戸隠山）の一つで、標高一九一七メートル。古くから山岳信仰の霊山として崇められ、参道の所々に江戸時代に安置された十三仏がお祀りされていて、巡拝しながら山頂を目指すことができます。中腹の登山口から三時間程で到着する山頂からは長野市内が一望でき、修行者のみならず、学校遠足や運動部のトレーニングなどでも、長野市民には馴染深いお山です。

また裾野には緑豊かな飯綱高原が広がり、長野オリンピックで競技会場になったスキー場、ホテルやペンション、キャンプ場やゴルフ場などのレジャー施設も整い、長野県屈指のリゾート地でもあります。山の名前は「飯砂」——つま



の山が全国の飯縄信仰の発祥の聖地となり、飯縄山と呼ばれるようになりました。

飯縄権現とは、不動明王と迦楼羅天、茶枳尼天、歡喜天、宇賀神、弁財天の「一仏四神五相合体」の仏さまで、飯縄権現をご本尊とする東京八王子の高尾山薬王院の縁起によれば、火炎を背負い、左右の手に剣と索を持つそのお姿は本

### 高尾山御本尊・飯縄大権現

成就の権現さまとして信仰を集めました。権現さまに願わくは、東日本や長野県北部を突如襲った大震災の復興本尊として、益々威力増し、被災された方々に生きる力を与え続けて下さることを、深く深く祈念する次第です。

（生きる力 SHINGON 第六十七号より転載）

### 訂正とお詫び

先月号二六頁「永遠の祈り」九行目、一千五百有余人は一万五千有余人に訂正します。茲に謹んで、大震災による犠牲者の御冥福をお祈り致します。

### 特別寄稿

## 高尾山の琵琶滝と蛇滝

台東区 中島 由美

高尾山は標高五九九メートル、都心から電車ですぐ一時間ほどで豊かな自然を体感できる。登山道がいろいろなコースに分かれているが、高尾山の中腹にある真言宗の名刹高尾山薬王院有喜寺を参拝するのならば、高尾山ケーブルカーに乗ってから表参道入口を進んで行くことよ。浄心門を通った先方には薬王院がまつている。四天王門をくぐり、本堂、飯縄権現堂、不動堂などをお参りして、富士浅間社を登拝すれば、やがては高尾山山頂に到着である。高尾山を訪れる多くの人がこのコースを選ぶという。

高尾山の自然を観察しながら



蛇滝での水行

ら、水行道場を巡るというコースがあり、信仰の姿を見ることができ。滝開きは四月一日に清滝、琵琶滝、蛇滝の開瀑式が修験者によりおこなわれ、水行道場として十月下旬の滝じまいまで、一般にも参加できるよう門戸を開いている。高尾山は粘板岩が多く砂岩が混じり脆いという。屋根の左右に琵琶滝と蛇滝があり、硬い岩脈よりできたという。（高尾山と八王子城「揺籃社」）

道場がある。高名な僧侶がこのあたりの山道で美しい琵琶の音色を聞いたところ、鹿が現れて、琵琶を弾く白髪の老人がいる大岩へと案内したという。僧侶は老人に悟りの教授を願っていたが、老人は大岩に消え、白髪に似た滝が姿を現わしたという。琵琶滝を水行道場にしたといい伝えている。（「高尾山」JTB）

琵琶滝から山頂をめざすコースは、急勾配の飛び石付近が難易度雷雨などにより増水して危険である。かつて文政六年（一八二二）八月一七日に大風雨により琵琶滝が増水して溢れ、琵琶滝脇にある行者堂が流失したという史料が高尾山薬王院文書に載っている。水行と山神の信仰により、諸病平癒や霊験を得る者があり、長逗留もあつた。当夜は江戸においても大荒れで被害甚大であつたという。（八王子市史附編「八王子市役所」）

現代でも悪天候の折は、頂上付近、飛び石は、増水しており危ないので、別の道の順序を考えて登山したほうがよいという。もう一つの水行道場蛇滝（標高三二〇メートル）を通るコー



水行道場の開瀑式

スは、裏高尾を歩く。高尾駅からバスで蛇滝口で降りて車道を進み蛇滝入り口に着く。さらに山中を行くと、石仏や野草が茂り、蛇滝へと導いてくれる。この滝のいい伝えでは、俊源大徳が獵師にころされそうになった白蛇を助けたことにより、白蛇はお礼として滝に化身して水行道場を作ったというのである。蛇滝は、蛇滝口バス停前に住む峰尾八重子さんの四代前の安五郎さんが開いたという話（『日本の名山高尾山』博品社）を読んだことがある。行者の照真さんが蛇滝付

近で水音を聞いて、ここを掘削すれば滝が出る」と安五郎さんに依頼したものの費用がないので、安五郎さんとおうめさんという人が出資して掘ったそうだ。万延元年（一八六〇）六月四日「蛇滝開瀑請負手附金受取りにつき一札」では、「金拾貳両也 手間飯料其外悉皆請負内金五両也」を高尾山から手附金として受け取り、当日一七日 相始、来月七日迄急度仕上可申候、御増金等決而 御願申上間敷候」とあり、多摩郡三内村請負人石屋 孫七 同 川口村証人安五郎の印がある。安五郎さんが蛇滝開瀑を請け負ったことがわかる史料である。

蛇滝で毎日修行をしていたお坊さんは佐藤盛範さんという方で、前貫飯山本秀順大僧正の御尊父だったという。蛇滝から霞台まで登り、薬王院を参拝して高尾山の山頂を目指すコースである。

いずれも滝の水音を聞きながら山道を行くのだが、自然の地形を利用した祈願や修行のための水行道場の開瀑は、篤信者、修行者にとって切に願っていたことだったのである。

## 高尾山の昆虫

### ナナフシモドキ

26



道端に落ちていた枯れ枝が突然動き出した：そんな感じでびつくりしてしまふのがナナフシの仲間です。昆虫の擬態を語る上で必ずと言っていいほど取り

上げられる擬態の名手で、さながら森の忍者の風情があります。ナナフシとは「七節」で中国に由来する命名のようです。パツタやカミキリと同じ直翅系昆虫で、擬態で有名なコノハムシも近縁です。この高度な擬態能力により、巧みに捕食動物の摩の手から逃れているのかどうかは分かりませんが、見た目には効果があるような雰囲気を感じます。細い枯れ枝のようなボディに非常に長い脚を持ち、これは樹上性昆虫の特徴ですが、道を歩行する時はあまり上手に歩いているようには見えません。

一般的にナナフシと思われるのはナナフシモドキです。モドキと付くからには本物のナナフシがいそうですが、不思議にないようでも可哀そうなネーミングですね。高尾山では個体数は少なく、路上で静止していたり、体を激しく揺らしながらとてもぎこちない歩行をする姿がしばしば見られます。

通常の昆虫は脚が取れてしまうと再生しませんが、ナナフシの仲間には再生能力を備えているようでトカゲの尾のように自切して逃げ延びようとします。

（文・撮影 松島 孝）